

第9回

書道監修・執筆 長野秀章

書聖・王羲之の世界 ～行書を始めよう～

今回学ぶこと

現在日常的に使用されている手書き文字の代表とも言うべき行書の学習を王羲之おうぎしの蘭亭序らんていじょの臨書や鑑賞を通して学んでみましょう。

学習前チェック！ 用語の意味を確認しておこう

行書／筆使い／連続／筆のあらゆる面／気脈きみやく・筆脈ひつみやく／王羲之／蘭亭序

行書の特徴

行書は、多くの人が日頃日常的に使用している書体です。その行書を毛筆を使ってその特徴に触れ、行書の持つイメージをあわせて学習しましょう。

筆が紙とどういう角度で触れたら行書の特徴の一つである「連続」が表現できるのでしょうか。筆の紙に触れる面が変わる様子をよく観察してみましょう。

蘭亭序の臨書学習を通して、実線で書いている所、実線でつながってはいないが筆が紙面の上を動いて、いわば気持ちでつながっているような所を筆脈とか気脈と言います。行書の臨書をすることにより、その筆脈や気脈ということを確認しながら学習してみましょう。

王羲之の生涯

4世紀に活躍した王羲之は、唐の時代になってもその書は尊重されました。今回学習する「蘭亭序」の実物の書は残っていませんが、その王羲之の書があまりにもすばらしいので唐の時代にその名人たちが臨書したものが現在に伝わっています。

その後も中国をはじめ日本にもその書は影響を及ぼしているので、王羲之は「書聖しよせい」とも言われ

今回の課題

半紙に「生」の漢字を行書体で書いてみよう。

ています。

その王羲之の書の財産とも言うべき蘭亭序は、行書の学習のお手本として今日に伝わり、それを臨書することにより、王羲之の書に触れ、行書そのものを理解することも大切なことです。

「蘭亭序」伝説

書の名作中の名作と言われる蘭亭序は、王羲之 50 歳のときに書かれました。

王羲之は別荘に名士を招いて「流觴曲水の宴^{りゅうしやうきょくすい うたげ}」を開きました。このとき作られた詩集の序文として、王羲之が書いたのが「蘭亭序」です。下書きのつもりで書いたので、書き直しや間違いなどもあり、後で何度も清書しましたが、それ以上の書が書けなかったと言われています。

「蘭亭序」の特徴は豊かな表現力です。たとえば、“之^の”の字など、何度も出てくる文字はその度に形を書き分けています。臨書では、次の一画への流れや線の強弱、リズムを意識しましょう。

達人からひとこと！

漢字の書体の中で行書は、全体のイメージも“柔らかい”、“楽しい”とても親しみやすい書体です。

手書きの際も自然と速く書いたときに表れる日常的に近い書体ですからこれからの学習を通してもっと行書に親しんでみてください。

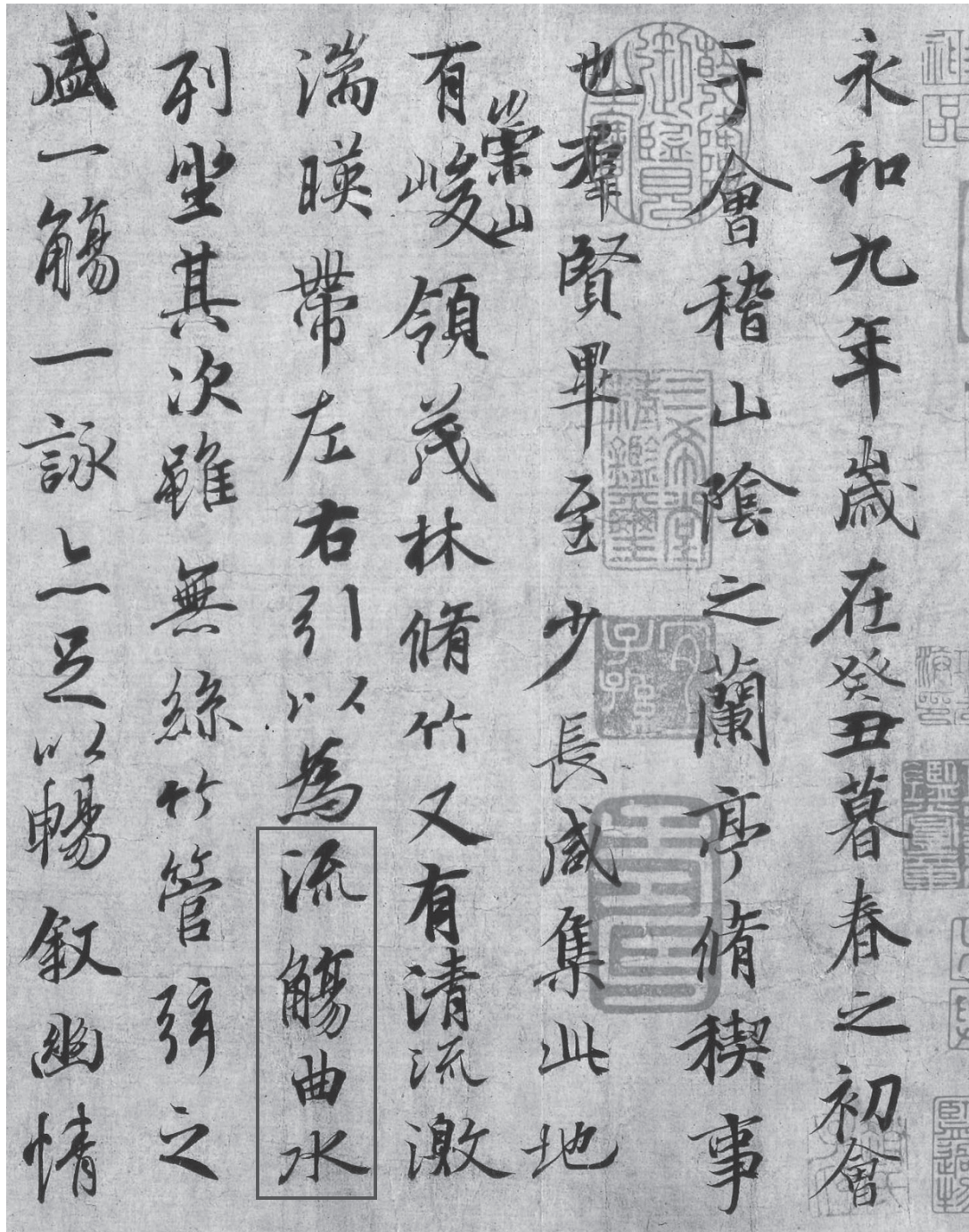


達人
長野秀章

今回の書

「蘭亭序」 王羲之

※部分



臨書する「流觴曲水」の
拡大は次ページ参照



Handwriting practice lines consisting of seven horizontal dotted lines on a white background, intended for copying the calligraphy above.